作品鑑賞

大島嵓山先生

墜葉驚沙積蓼窓　射波寒月影幢幢　此身却似淘河鳥　纔過南江又北江
柔櫓軽風覚有情　月高牛渚看潮生　江神木客争伝語　可是袁家旧阿宏
耗尽雄心鬢亦皤　瀟亭無奈尉誰何　珊瑚百尺根株老　不信天家無鉄羅
（袁宏道詩　衛河道中和丘長孺惜別）

現代書壇代表展　1988

104×234

菊蹊（きくけい）　高啓

獨行林下路　独り行く　林下（りんか）の路（みち）
望望南山暮　望み望む　南山（なんざん）の暮（くれ）
無酒掇英嘗　酒無くして英（はな）を掇（と）って嘗（な）むれば
寒香已零露　寒香已（すで）に零露（れいろ）なり

林の道をひとり歩んで
日暮れの南山を眺めやる
菊の花びらを盃に浮かべようにも酒はなく、花びらを採って食べると
したたり落ちんばかりの露に、清冽な香りが篭っていた。

《菊　蹊》菊の咲く小道
《英》花。特に実がならないもの。
《掇　る》えらび取ること。
《嘗める》味わいためす。
《零　露》滴り落ちる露

高啓（一三三六～一三七四・号青邱子）は明の太祖朱元璋にその才能を買われて、南京で「元史」の編纂に従事しました。その後、戸部右侍郎という現在の大蔵次官にあたる地位に抜擢されましたが、あまりにも急激な昇進に不安を感じ、固辞して故郷の蘇州へ帰ってしまいます。三十五歳の時でした。そして蘇州の郊外青邱で作詩に専念する日々を送りました。

一方、流民から身を起こし皇帝にまで登りつめた朱元璋は猜疑心が強く、有能な人材が将来、危険な存在になることを恐れ次々と弾圧しはじめていました。

古より、山や丘などの高い所に登って、菊の花を酒に浮かべて呑むと長寿を保つという言い伝えがありました。これは重陽の節句（陰暦九月九日）に行われる風習としても知られています。「南山」は固有名詞となると西安の南方に聳える「終南山」の別称ですが、ここでは古来その名が知られた「終南山」を意識するものの、その含意には「どっしりと構えた山」の意味として使われています。また山は永遠に不動の存在であることから長寿を祈念する成語に「南山の寿」がありますが、高啓はこれを踏まえているのかもしれません。

高啓は酒に浮かべて呑むかわりに、菊の花びらを採って食べ、心の片隅で南山の如き自分の長寿を願ったことでしょう。しかし、朱元璋の猜疑心は高啓にも及び、知人で蘇州の知府だった魏観の罪に連座して処刑されてしまいました。朱元璋を風刺した詩を作ったからとも、また反抗の詩を詠んだからとも言われています。一三七四年、三十九歳という若さでした。

書人傳

明末と藝苑

佐藤　象雲

この「書人傳」で、董其昌・張瑞圖・王鐸・傅山と明末の諸家を紹介してきましたが、この時期は政治史的に紛れもなく衰退と混迷の一途を辿った時期であったことは理解頂けたと思います。だが文化面だけに限ってみると、書に限らず、工芸・美術絵画・文学など藝苑の世界では歴史上特異といっていいほどの光芒を放った革新の時代でした。万暦赤絵の壺や、徐渭や董其昌の文人画や明末の大詩人袁宏道の出現はそのほんの一例です。書人では上記の本欄で紹介したほかに、倪元璐、黄道周なども挙げられます。

ではなぜこの生きることも困難な時代に、生活の背後にあった現実の苛烈さとは全く別な、一種洗練された明末ロマン派と称せられた書人が現れたのでしょうか。この時代に生きた漢民族文人達はその名状し難い鬱積苦悩の中にあったからこそ、爆発的ともいえる革新的な藝苑が展開されたと私たちは理解しようとしますが、それだけでは説得力に乏しく、どうしても心底から納得できない疑問が残ります。

その疑問を解く一つに、農村以外の一般には生活の充足と享受の豊かさがあったということです。確かに、しばしば飢饉、叛乱、外敵の侵略などが起こり、明という時代の命運を蝕む要素となりはしましたが、とくに都市の市民たちの生活にはほとんど響くことがなかったといいます。これは主として商業経済の盛んな発展に負うものでした。万暦帝の奢侈は殊に有名ですが、皮肉にもその贅沢品の調達のために染織業や製陶業が飛躍的に発展し、揚子江下流域や蘇州を中心として、賃金労働者を擁して大量に絹と綿織物を生産し、その技術も洗練されていったという史実があります。加えて商品の売買に伴い外国貿易まで発展して、中国への銀の流入は明末に至って年々増大していきました。一部地域に限定はされていましたが、この商業経済の潤いは、政局の悪化と国運の衰退にも関わらず、意外にも明末の文化と生活を色彩豊かなものとする条件となったらしいのです。

またもう一つ。これは一番大きな要因というべきかもしれませんが、明中期以降の文化思想の大きな転換があります。書壇においては董其昌の出現です。董其昌は、その書論「晋人の書は韻を取り、唐人の書は法を取り、宋人の書は意を取る。」の言葉のように、時代各々の特性を見出し、形式主義や復古主義を排しました。そして、魏晋の精神を継承して書風を確立した顔真卿をはじめ、宋の蘇軾・黄庭堅・米芾などの個性的な書の系統を尊重する体系を構築しました。

思想哲学の分野では、明代中期に「陽明学」を提唱した王陽明は、人間本来の本能を尊重することを基本として、聖賢の教えは我々が持って生まれた生来の心の中に存するのだと説きました。さらにこの思想を継いだ思想家、李卓吾は、一切の外的なもの、粉飾されたものを拒否して真実を追求する「童心説」を唱えます。この考えは現実の世界では多くの軋轢を引き起こしたようですが、その一方でマンネリズムを打破する革新的な藝苑を創造していく原動力となりました。文壇においては公安派の詩人袁宏道が李卓吾の啓発を受けています。公安派は当時文壇を風靡していた擬古主義や古文辞の模倣を排斥して、詩文とも自由な心情の自由な表現を旨としました。袁宏道は、奇なるもの、異彩を放つもの、独自の価値を主張するもの、ただそれだけで尊重し愛惜したといいます。これはまさに傅山の「巧より拙、媚より醜、軽滑より支離、按排より真率」を説いた「作字示児孫」の一文と全く同様な価値観です。奔放不羈に書を展開した王鐸・傅山をはじめとする明末書人たちが立脚した理念ともいえるでしょう。

話は明末の政治情勢にもどりますが、魏忠賢のような宦官の跋扈や朋党の争い、そして北虜南倭と言われる北方と東南海岸からの侵略があり、また完全な皇帝独裁制で皇帝の逆鱗に触れれば、「廷杖」といってどんな高官といえども杖で殴り殺される時代相です。明末は特に人間の尊厳性は失われていた時期といってよいと思います。これらの過酷な時代背景が皮肉にも明末を生きた書人たちに焦燥感を伴った芸術的意欲を引き起こさせ、数々の名品を生む大きな根本要因であったことは間違いありません。

秋山　余照を斂め　飛鳥　前侶を逐う　彩翠　時に分明　夕嵐　処所なし

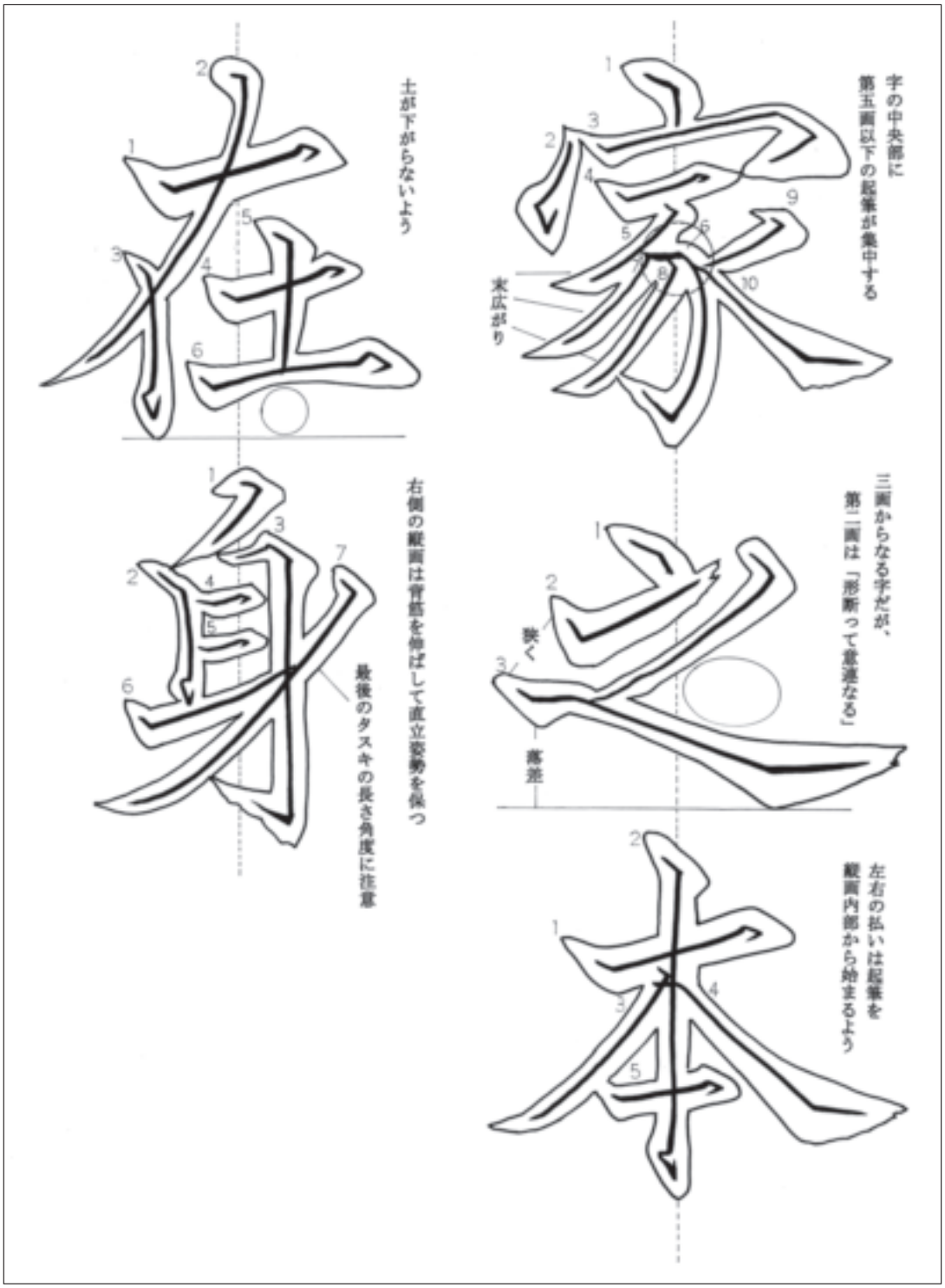
《大意》秋の山の夕映えはおさまり、鳥は友を追って飛びゆく。秋になってさまざまに色づいた山の草木のみどりがはっきりと明らかで、夕もやのかかるところもない。（王維詩・木蘭柴）

秋風蕭瑟として天気涼し

《大意》秋風がもの寂しく吹いて天空の気はひややか。（魏文帝詩・燕歌行の一節）

読み　家の本は身に在り（家の根本は自分の身にある「孟子・離婁上」）

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。

・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。

・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

行　書

草　書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷　書

次号課題

月華　静夜に臨む

ペン字部課題　（９月30日〆切）

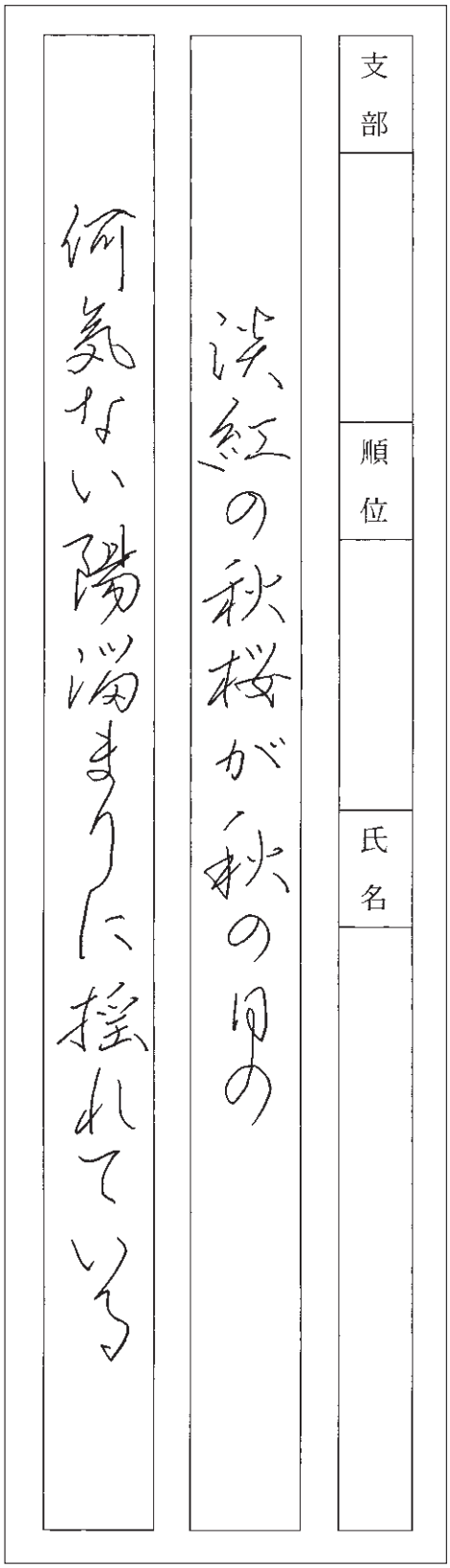
細字部課題　（９月30日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲書

音　カンライショオウ　シュウシュウトウゾウ

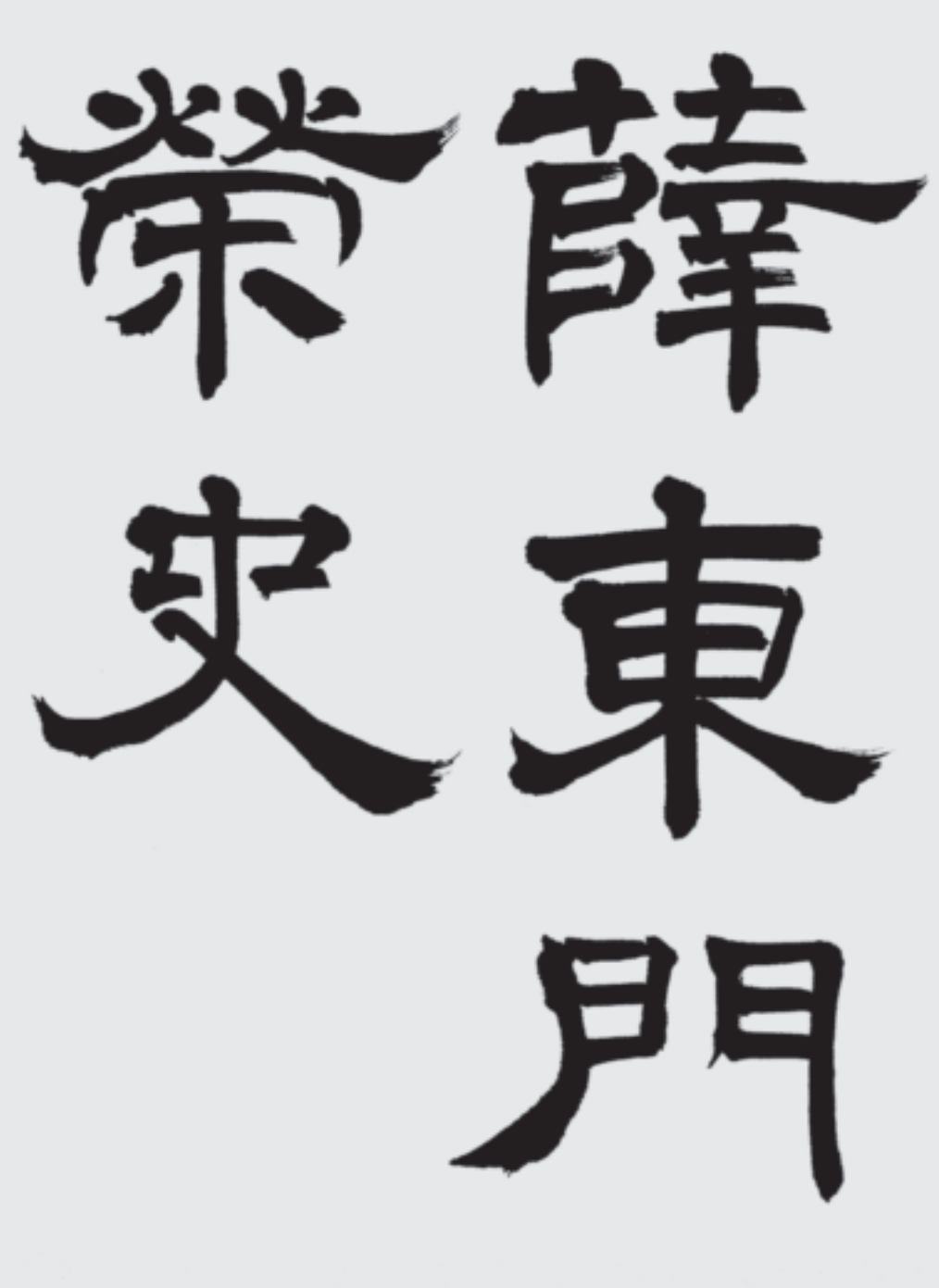
略解　寒さ来れば暑さはゆく　秋に収穫し冬は貯える（一年の正しい移り変わりをいう）



和泉溪石先生書

■史晨後碑（ししんこうひ）（後漢・西暦一六九年）の臨書（7）

薛の東門栄、史たる……



象雲臨

『薛東門榮史』

隷書体の規格基準といえば水平垂直です。特に左右のバランスと字座の安定が求められる書体ですので、まずこの水平垂直の筆使いを身に着ける必要があります。この史晨碑は格好の古典です。

「薛」草冠の下の旁、「辛」は上部の第一点を横線にし、下部は三横画で作ります。

「東」左右整斉な結体。上部は鍋蓋同様に、点・横画で書くことも間違いとは言えず、史晨碑には「去」「来」「本」の上部など同様の筆法が多くあります。拙臨は上部から縦画で突き通しています。

「門」左右縦画の変化に注目。左縦画は左に払い、右縦画はやや背勢に止めます。史晨碑のなかでは「月」「周」なども同様に処理しています。

「榮」上部の二つの火は左右に拡げ、下部は幾分幅を抑えています。

「史」口を小さくして左右の払いを強調します。左払いは曲。右払いは直。

流觴曲水

象雲臨

■王羲之・蘭亭序（東晋・西暦三五三年）の臨書（9）

『流觴曲水』

流觴曲水とは、川の水を引いて曲がりくねる小川をつくり、流れに沿ってみんなが坐ります。そして川上から酒を満たした盃を流し、自分の前に盃が来るまでに詩を賦しその酒を飲み、詩の出来なかった人はさらに罰杯を受けるという雅会です。この日は、四十二人の文人が集い、そのうち十六人が詩を作れなかったといいます。王羲之がこれらの詩篇の序文を揮毫したのがこの蘭亭序です。

王羲之は酔いが醒めたあと蘭亭序を幾度も書き直しましたが、これ以上のものは書けず、自らこれを傑作と認め、子孫に伝えたといいます。

ちなみに蘭亭序を蘭亭叙と書く場合がありますが、蘇東坡が祖父の「序」を避けて「叙」書いたために広がったものです。これは皇帝や目上の者の諱（生前の名）を避けて他の字に置き換える「避諱改字」という中国古来の風習です。